

# 郭沫若研究会報

## 第七号（総 No.8）

（日本郭沫若研究会事務局二〇〇五年十月三十一日発行）

### 目 次

随想： 作品の力と寿命のこと

『屈原』『四世同堂』『寒夜』にふれて・・・杉本達夫

青島郭沫若学会参加記・・・岩佐昌暲

戦前の中国文学研究会

郭沫若との関わりを中心に・・・武 継平

郭沫若の詩作とその背景

日本における四つの詩碑を通して・・・宮下正興

編集後記・・・事務局

\*\*\*\*\*

#### 随想： 作品の力と寿命のこと

——『屈原』『四世同堂』『寒夜』にふれて

杉本達夫

一

日中戦期、重慶のソ連大使館に勤務するフェドレンコが、ある日、郭沫若の書庫で辞書をめくっていたところ、郭沫若が書斎からそそくさと出てきて「ペンが壊れた」云々と言い、フェドレンコのペンを借りて、またそそくさと引き返した。やがて出てきて郭沫若は、「たった今、このペンで『屈原』を書き上げたんですよ」と言ったそうだ①。一九四二年一月、手足の凍える時期のことである。『屈

原』は郭沫若の歴史劇の代表作であり、日中戦期の劇の代表作のひとつに数えてよいだろう。その『屈原』はこうして、他人のペンを借りて完成したのだった。

周知のごとく、郭沫若は日本から帰国後、国民政府軍事委員会政治部第三庁の庁長となり、第三庁が解散させられた後は、同じく政治部に新設された文化工作委員会の主任を務めた。肩書きはれっきとした国民政府高官である。だが実質において共産党を代表する文人であることは、当時の誰もが分かっていた。なお、呉奚如によれば、共産党中央は早くも三八年夏に、郭沫若を魯迅の後継者、革命文化界の指導者とする決定したそうだ②。魯迅の後継者を機関が決めて、いったい何を後継するか戸惑うし、魯迅が聞いたら眉をひそめるだろうと思うが、要は左翼文人を束ねるかなめの役を担うということなのであろう。事実、左翼の文人たちは事あるごとに郭家を訪れていた。たとえ内部的であれ、そういう役割の人物となっているからには、書くことも話すことも、純粋個人の営みではありえない。すべて党の意向と結びつけて受け取られるのが、自然の流れというものだろう。

『屈原』は戦国時代の、楚が秦にしてやられる史実と、『楚辞』に盛り込まれた詩を舞台に再現しながら、詩人屈原の魂の叫びを綴る。古代史を再現しているかに見せながら、言うまでもなく、生々しい目の前の政治状況に対して発言し、蒋介石政権の方針に異議を申し立てている。政治的意図は明快であり、比喩は明瞭である。楚は国民党支配地区、中央政府を擁する大後方であり、楚に甘い罠を仕掛ける秦は日本であり、その罠に気づかぬ楚王は蒋介石であり、屈原が提携すべき国だという齊は、毛沢東を頂点とする辺区である。この構図の中で屈原は、秦のねらいは他国併呑であり、楚が自らの存続を確保するには、齊と手を携えて秦に対抗する以外にないと説く。四二年初頭の状況、政治上の国共合作が事実上崩れ、左翼への弾圧がいよいよ厳しい状況に身をおいて、舞台の屈原は蒋介石に批判の矢を放っている。そういう背景があってはじめてこの劇は成立するし、観衆も熱く反応する。劇の意図は国民党がわにまずよく伝わる。

郭沫若は屈原の口を借りておのれの胸のうちを叫び、共産党の立場を叫んだ。だから舞台の屈原は、古代の屈原がいうはずもないせりふを口走った。姦計を弄した南后に屈原は叫ぶ。「あなたが陥れたのはわたしではない。われらが楚であり、われらが中国全土なのだ」と。「赤県神州」をそこない、「整個中国」をそこなうというのである。屈原が生きた戦国時代に、今日の「中国」という概念が成立していたらどうか。「整個中国」とはどこからどこまでを言うのか。秦は含まれるのか含まれないのか。秦が含まれなければ楚も含まれないはずだろう……。が、こういう感想は揚足とりというものだ。劇の主旨は明瞭なのであり、観衆は小事にはこだわらない。屈原の叫びに共感し、かの「雷電頌」の迸ることば、闇を砕き汚濁を切り、自由を求めることばに酔うのである。

現実の結果はどうなったか。日本は敗れ、内戦を経て共産党が全土を制した。比喩の図式でいえば、秦がまず消え、齊が「整個中国」を掌握した。楚は秦にではなく、齊に滅ぼされたことになる。史実で言えば、秦は初めて統一国家を作り上げ、中国史の一大転換を成し遂げた。屈原の楚を守ろうとした努力は、歴史の流れに逆らったことになる。『屈原』は、国共の先鋭な対立が世を闇に閉ざしていたから、詩性にくるんだ政治性が殊更に光を放った。その決定的な要因である対立が消えてしまえば、劇の有効性も薄れるだろう。抗日戦が回顧され、日本の侵略が糾弾されている今、『屈原』は想起さ

れているだろうか。

## 二

『四世同堂』は、日本占領下の北平を舞台にした老舎畢生の大作であり、抗戦期文学の代表作のひとつに数えてよかろう。八〇年台半ばにテレビ連続ドラマ化されて、全土の人気をさらった。全国で、珍しくチャンネル争いのない番組だったそうだ。人気は『姿三四郎』を上回ったのかもしれない。『四世同堂』は長い長い小説である。簡単には読破できない。だから、読んだような顔をしながら読んでおらず、テレビドラマではじめて筋立てを知ったという知識人が多いらしい。ドラマは小説とは別物なのだけれど。題名を知っていても読めなかったことには、もうひとつ大きな理由がある。七九年十月まで、新中国では出版されなかったからである。第一部と第二部は戦後の上海で出版された。第三部はアメリカ滞在中に書き上げたのだが、発表は建国後の雑誌に途中まで掲載されたきりで途絶えた。末尾一三章は原稿の行方も分からない。一三章分の筋立てが分かるのは、英語による要約版が残っているからである。まるまる三〇年も寝かされた後、開放政策とともにようやく光を浴びたことになる。政治の枠が緩んで以来、『四世同堂』に限らず、老舎の民国時代の作品は、つぎつぎと出版され、映画化され、テレビドラマ化されている。

日中戦期、老舎は文芸界の統一戦線組織「中華全国文藝界抗敵協会」（略して「文協」）のかなめの位置にいた。山東時代の老舎は、群れを離れて群れを恋わない姿勢を持していたとわたしには映るが、戦争期に入るなり、一転して組織活動に献身する。文協は純然たる民間団体であるが、経費はほとんどが政府と国民党からの補助金に頼っている。かねのない団体のかなめとなって、国民党、共産党、無党派の作家を一堂につなぎ、機関にかけあい、金策に走り、ものを書いて暮らしを立て、病気を抱えながら老舎は多忙を極めた。『四世同堂』に取りかかったのは四四年に入ってからで、このとき老舎は北平から移ってきた家族とともに、重慶の北にある北培に住んでいた。このような大長編に着手できたのは、重慶の破壊、インフレ、政治状況の悪化などで文協が半身不随となり、老舎にひまができたということだろう。

『四世同堂』にはおびただしい人物が登場する。日本の占領下で、ひとびとはひもじさに耐え、息苦しさに耐え、理不尽に耐えながら、あるいは助け合い、あるいはいがみ合いながら生きる。ある者はおとなしく生き、ある者は抵抗に踏み出し、ある者は勇んで日本に協力する。北平という歴史と文化の街の、占領下という特異な状況下の人々の思考と行動を通して、老舎は中国とは何か、中国文化とは何かを探り、危難の中でこそ明らかになる精神の気高さにそれを見出した。占領下の北平の様相を老舎に伝えたのは、三児を伴って北平からやって来た胡絮青夫人である。夫人は北平で女学校の教員をして一家を支えていた。夫人が伝える北平の様相には、当然ながら伝聞が相当に混じっている。老舎はその話を紡いで、雄大壮麗な物語を織り上げたのである。

だが、老舎は北平の土地勘はあるが、占領下の体験はない。想像力を働かせるしかない。それが理由のひとつになるだろうか、物語の展開に、どこか不自然な印象がついてまわるのである。老舎は「日

本と戦え、日本を倒せ」と叫び続けた作家であるが、抵抗のあり様も漢奸たちの姿も、作り物じみているようにわたしには感じられる。人物の造形も細部の構築も、『駱駝祥子』に比べて一段落ちる。テーマが先走っているのだと思う。なお、老舎は抵抗を描くに当たって、抵抗する人物や組織に党派色をもたせないようにしている。国共いずれかに傾くことを避けている。老舎は意図的にそうしているのであって、党派的対立を拒否し、葛藤のない社会を希求する旨を無言で表明しているのだと、わたしは考えている。

物語の終盤になって、英語を話す日本の老婦人が登場する。日本の良心を代弁するような夫人を設定したのは、ひょっとして、ニューヨークで石垣綾子と知り合った痕跡なのかもしれない。また、その老婦人が同居する日本人家庭の若妻が、夫が戦死したあと慰安婦にされることになっているが、これなど日本の戦死者遺族への扱いとして信じがたい。老舎がこういう話を挟んだのは、三八年夏に文協機関誌『抗戦文藝』に載った通信を利用したのだと思われる。「最近ある日本兵がナイフで顔をめちゃめちゃにしたあと、のどを掻き切って死んだ。時を同じくして、慰安所のひとりの慰安婦が首を吊って死んだ。その兵士の妻であって、日本から慰安婦として送られてきて、ここで顔を合わせ」云々という通信である③。通信とはいえ、内容はいかにも図式に合わせた作り物くさい。慰安所とか慰安婦とか、日本軍のイメージが刷り込み的に広がっていたことが察せられるが、少なくとも、出征軍人の妻を慰安婦に送るなど、日本ではありえない話だとわたしは思う。

『四世同堂』は抗戦文学の代表作とあってよい。日本軍との激しい戦闘が続く時期、あるいは苦闘の記憶がまだ生々しい時期、占領下の北平の物語は、民族の尊厳をかけた歩みとして、ひととき人々の胸に響いたと思われる。八〇年代のテレビドラマは、政治の縛りが解けたあとのある種のゆとりをもって、あるいは文革期と重ね合わせて、ひとびとにきのうの自分を思い起こさせたいだろう。その占領とか戦闘が遠い記憶となったとき、物語は同様な感動を呼びうるだろうか。世代の溝より大きな溝ができ、空気の壁ができていのではないか。

### 三

巴金の『寒夜』は四六年後半に発表された（『文藝復興』に連載）。時期としては戦後になる。だが着手したのは四四年、結婚間もないころであり、内容は戦時の重慶の物語であり、抗戦文学に数えてよかろう。巴金は文協の理事に名を連ねてはいたが、活動の主力ではない。政府や政党の仕事にも加わっていない。民間の片隅の一編集者であり、物静かな作家であった。戦時に作品は多いが、『春』『秋』であれ『憩園』であれ『第四病室』であれ、時局に対してものを言う姿勢はない。『寒夜』もまたそうである。

主人公と妻はともに教育学を学び、教育事業への夢をともにして結ばれた。戦争によって夢は絶たれ、一児をつれて重慶に戻った。主人公は政府系の出版社でしがたい校正係を勤め、胸を病んである。妻は美貌で、銀行で秘書となっている。職場の花の役割、つまりは「花瓶」に過ぎないが、収入はよい。主人公の母は、自由結婚をした嫁を息子の妻と認めることができず、その「妾」の収入で暮らしが支えられることが耐えがたい。我が子がふびんと思えば思うほど、その妻への憎さは増し、間に立

った主人公は、とりなすことばに力なく、かねなく策なく、苦悩を溜めこんで、病気は悪化の一途をたどる。息子は妻の力で高い私学に入っているが、家の事情が反映して、元気を失い学力を落としてゆく。軍事情勢の悪化に伴い、妻は家の空気に耐えかねて、単身蘭州の新店舗に異動し、家に送金を続ける。主人公は勤めを辞めて寝たきりとなり、母の献身もむなしく死んでゆく。勝利の後、妻が帰ってきたとき、もとの家に夫はおらず、母も息子も行き先は知れなかった。

暗澹たる結末である。家に悪人はひとりもない。それぞれ懸命に生きている。悲運は外から来たのであり、日本がしかけた戦争が、死をもたらし離散をもたらしている。だが家族の誰も、抗日も叫ばず反戦も叫ばず、政府批判も口走らず、被害者意識もふりまかない。破られた夢にしがみつきもしない。片隅の平凡な市民は、目の前の生きる手がかりを必死につかんでいるしかない。一家の歩んだ道は、どこにでもある無数の家庭の道でもある。平凡で、しかも苦悩に満ちた家庭の、時々刻々の表情が、ふとした出来事が、一人一人の心の動きが、細やかに、かつ淡々と語られて、緩みのない小説空間が築かれてゆく。それゆえに、人物たちが叫ぶことのない戦争への抗議が、不条理への怒りが、平和と幸せへの願いが、じわじわと読むものの胸に沁みてゆくのだろう。天下国家に結びつく主張を叫ばないからこそ、叫ばぬ無言の訴えが強力に迫ってくるのだろう。もちろん、それを可能にするのは、小説作者の力量であり読者の想像力である。

戦争の時代が遠く去っても、災禍の記憶が失われても、この作品は長く生きるだろうとわたしは思う。巴金自身による評価は知らないが、巴金の作品の中では、わたしは『寒夜』がいちばんすきである。『憩園』が次いでよい。

『寒夜』は八〇年代前半に映画化された。わたしは見たはずなのだが、記憶がすっかり薄らいでいる。ただ、日本機来襲の警報を伝えるのに、大きな風船が上がっている場面があり、なるほどこれかと納得すると同時に、あのご時世にどうやってガスを入れるんだろうと、余計な疑問を感じたことを、いま思い出した。

#### 四

ここにあげた三作品を、わたしはいずれも一八歳の時に翻訳で読んだ。河出書房から出ていた現代中国文学全集全十五巻によってである。それぞれに感動した。当時の中国は竹のカーテンの向こう側にあり、カーテン越しの乱反射もあって、清く正しい輝きを感じさせていた。三作ともに建国以前の作品であるが、わたしの感動は建国後のカーテン越しの中国に結びついていた。あれから五十年、わたしはもう耕作の役にも立たず、処分を待つばかりの駄馬である。今年は抗日戦争勝利六十周年を記念する年であり、反日運動が高まった年でもある。中国は戦勝国であるが、抗日戦は国共の争いを内蔵しており、ことは単純ではない。戦争当時にどんな作品が書かれていたのか、翻訳で読んだ時期の懐かしさも含めて、あらぬことを書き綴ってみた。会報の紙面をふさいで恐縮。

(二〇〇五・一〇・九)

① フェドレンコ著、木村浩訳『新中国の芸術家たち』 朝日新聞社、一九六〇年

- ② 吳奚如「郭沫若同志和党的關係」 『新文学史料』 八〇年二期所収  
③ 鮑雨「揚州の日兵在自殺」 『抗戰文藝』 一卷九期（三八年六月一八日）に掲載
- 

## 青島郭沫若学会参加記

岩佐昌暲

青島郭沫若学会というのは私が勝手につけた名前で、正式な名称は「〈郭沫若与中国知識分子在民族解放戦争中的文化選択〉国際學術討論会」という。中国郭沫若研究会、郭沫若記念館、青島大学中文系の共催で、八月十四日から十八日まで青島大学国際学术交流中心で開かれた。ただ中国のこういう学会の通例で、十四日は全日受付、自由交流（早く到着した者同士で交流しなさいの意）、十七日は労山文化考察（実際には青島の観光名所労山への遊覧）、十八日が解散だから、実質的な學術討論は十五、十六の二日間だけということになる。

私は十四日の午後北京空港を発って四時すぎ青島空港についた。空港には青島大学中文系の院生が出迎えていて、先に到着して私の到着を待っていた韓国からの研究者（高麗大学校の白永吉教授）といっしょに青島大学に向った。青島大学は青島市の市内にあって、海に面したゆるやかな傾斜をもつ丘にキャンパスが広がる。私たちの宿舎は校門に近い国際交流センターで、これは相当の部屋数をもつホテルであった。会場はそこから徒歩数分の近さにある行政楼四階の会議室である。

十五日朝八時半から中国郭沫若研究会副会長の蔡震氏の司会で開幕式が始まった。中国郭沫若研究会章玉鈞副会長（彼は四川省政治協商會議委員でもある）、青島大学夏臨華教授、郭沫若記念館郭平英館長の三氏が主催者代表として歓迎の挨拶をした。章副会長の挨拶では学会開催のために中国社会科学院国際合作局から相当の援助があったことが紹介され、謝辞が述べられた。

次いで直ちに研究発表に入った。午前の部は、蔡震、魏建（山東師範大学）の両氏の司会により、以下の六氏の発表がおこなわれた。（以下すべて発表順）李怡（西南師範大学）、賈振勇（山東師範大学）、金恵俊（韓国釜山大学校）、楊勝寛（欒山師範学院）、武継平（立命館大学）、魏紅珊（四川省社会科学院）。

午後の部は二時から五時半までの予定で次ぎの八氏の報告があった。王光東（上海大学）、岩佐昌暲（熊本学院大学）、斎藤孝治（ジャーナリスト、作家）、佐藤翔子〔郭翔〕（中央音楽院）、税海模（四川巴蜀郭沫若研究中心）、劉悦坦（山東大学）、蔡震（中国社会科学院）。

十六日は午前中が研究発表。午後が前半は自由発表、後半は代表発言と司会者による総括発言がおこなわれた。

まず午前中の研究発表の発表者は廖久明（欒山師範学院）、白永吉（高麗大学校）、李旭淵（西江大学校）、坂井尚美（日中法律家交流協会）、魏建（山東師範大学）、秦川（四川省社会科学院）、王錦厚（四川大学出版社）、胡志毅（浙江大学）、陳俐（欒山師範学院）の九氏であった。

午後は本来二つのグループに分かれて討論する予定だったが、それをやめて合同での自由討論とい

うことになった。司会は魏紅珊、賈振勇のお二人であった。その後四時半から蔡震氏の司会で魏紅珊、賈振勇両氏の自由発言のまとめ、李波（重慶市沙坪壩区文広局）、甘学勤（樂山市沙湾区党委）の二人による重慶、樂山という郭沫若ゆかりの地での郭氏顕彰活動の報告があった。最後に中国郭沫若研究会副会長謝保成氏による二日間の討論のまとめの報告があつて学会討論は終わった。

なお、十五日の夜は郭沫若研究会主催の、十六日夜は青島大学主催の歓迎宴会が宿舎・国際交流会館地下のレストランで開かれた。（大会参加者全員が招かれたわけではなく、外国人研究者と主催者側の主だった人々だけ）。朝食や昼食もそうであったが、食卓には茹でたサトイモが必ず出された。二回の宴会には山海の珍味のほかに、サトイモとかぼちゃの煮つけを盛り付けた皿も並んだ。こうしたある種鄙びた料理には主催者側の温かい歓迎の気持ちがこめられているようで、うれしかった。青島はちょうど青島ビールのビール祭りが開催中ということで、宴果てた後街にくりだした参加者が多かったようだが、微熱のある私はテレビで抗日戦勝利の記念番組を見ながら部屋にいるほかなかつた。

このたびの学会の総テーマ「郭沫若与中国知識分子在民族解放戦争中的文化選択」は無論、八月を中心に大々的に繰り広げられている抗日戦争勝利六十周年記念のさまざまな行事・キャンペーンの一環として開かれたものである。従つて発表もほとんどこのテーマに沿つて、郭沫若の抗日戦争の中で果たした役割や、抗日戦争中の文学と文化活動の意味を明らかにし、研究上の位置付けを与えようとするものであつた。日本郭沫若研究会からは私のほかに武継平事務局長、斎藤孝治会員の三名が参加し、いずれも発表をおこなつた。

武さんの発表は郭沫若の日本亡命時期についての考察で、戦前の内務省警保局「外事警察概況」、外務省資料館所蔵警視庁関係極秘資料、日本社会運動史、千葉県労働運動史資料などを使って、「亡命中の郭沫若が日本上陸時点から監視をうけ、警視庁に「共産主義者」のレッテルをはられたものの、思想検察部門最高責任者だった平田勲検事、および日常の監視任務にあつて市川警察署の庇護のおかげで、実際には「要視察」の「重要容疑者」にされず、普通の「要注意人」として「保護性監視」を十年間うけていたという警察の監視実態を明らかにした」ものである。内容は、郭沫若と南京国民政府との関係を調査した「日支人民戦線諜報網」の考察、郭沫若に対する警察の監視実態の考察、東京高検思想検事平田勲による郭沫若の保護（平田の紹介と保護の実態、その理由）の考察、郭沫若脱出後の「日支人民戦線諜報網」の検挙、公判の実態、「日支人民戦線派」諜報員主要人物の考察からなつている。極めて実証的な報告である。（だが、実は私は大会参加前に北京でかかつたひどい風邪+気管支炎が悪化し、発熱とせきに悩まされ、おまけに鼻水がとまらないという最悪の健康状態であつたため、午前の部の途中青島大学の診療所に行って治療を受け、午後の自分の発表も原稿を武さんに代読してもらつた始末だつた。このため、武さんの報告を聞いておらず、以上の紹介は発表原稿によつている。）この報告は今回の学会発表で最も反響が高く、二日目の自由発表の際、何人もの研究者がこれに言及した。

斎藤さんの発表も武さんの発表と表裏をなすもので、武さんも言及した平田勲検事についての紹介である。斎藤さんの発表題目の市川事件というのは、郭沫若日本脱出後日本の官憲が動き郭夫人の安娜を逮捕し、スパイ事件をでっちあげようとした事件。武さんとやや違つて斎藤さんは人間平田勲を

描出しようとしていたように思った。

私のは、学術発表ではなく、日本郭沫若研究会の紹介（設立経緯、活動内容、会報目次など）であるが、これも史料として中国郭沫若研究会関係の会誌（たぶん『郭沫若学刊』）に掲載してもらえようである。

このほか、われわれには面識のない大阪からの参加者三名がおられた。そのうちのお一人坂井尚美氏がエスペランティストの長谷川テル（緑川英子）について報告された（ただ私はその時間は部屋で臥せていたので内容を知らない）。坂井氏のように研究機関に所属する研究者以外の方が研究発表をするというのは郭沫若研究会の特徴で、これは郭沫若その人が文学者、歴史家としてだけでなく政治家、平和運動家としても活躍した活動のはばの広さを示すものであろう。こういう人たちとわれわれも連絡をとりあって研究の幅をひろげていく必要があるだろう。

中国の学会に行くといつも感じるのだが、下手をすると空理空論に堕しかねない、実証なき研究発表が少なくない。特に郭沫若のようにすでに多くの事実がわかっている人については、その文学的位置づけや今回の学会テーマのような「文化的選択」などといったことを論じてこと足れりとする傾向が強い。その点、今回の日本からの参加者の発表はいずれも実証に基づくもので、はしなくも日中両国の研究姿勢の相違を示すことになったように思った。また日本からの参加者の発表は、日本にしかない資料を使ったもので、中国に在住する研究者には不可能な研究だろう。こういう研究が研究上の空白を埋めていくわけで、今後は両国の研究者による共同分析でこうした研究が深められることを期待したい。

また、将来は郭沫若の過ごした日本を文献と想像でしか知らない、中国の研究者に日本に来てもらって合同の学会が開けたらいい、などとも私は考えた。われわれの研究会としても真剣に考えていいことではないだろうか。

以上、青島郭沫若学会に参加した報告である。最後に、学会それ自体とはあまり関係のないことを少し書いて、筆をおきたい。

前回北京での郭沫若学会もそうだったが、この学会では四川からの参加者の数が多く、宴会や、休憩の際には四川方言がとびかっていた。先日大高順会員が武継平、藤田梨那両会員と共訳で刊行された労作『桜花書簡』に収められた手紙も、こんな四川なまりで読まれたのだろうか、などと想像しながらそれを聞いた。

青島ではこの地に滞在したことのある文人たちの跡を尋ねるのもひそかに楽しみにしていたことだった。これは出発の日の午前中、前に九州大学に留学していた黄英さん（青島海洋大学講師）のおかげでかなえることができた。彼女は前日急病で設備のよい上海の病院に検査に行ってしまったが、ご主人が自分の会社の車を回してくださり、私は日本語のできる左さん（ご主人の会社の同僚）という人の案内で、小雨けぶる青島の旧市街に散在する老舎など文壇の故居を堪能したのだった。

（二〇〇五年十月）

## 戦前の中国文学研究会 ——郭沫若との関わりを中心に

武 継平

「中国文学研究会（以下「中文研」）」といえば、それはあの言わずと知れた、竹内好を中心とする中国文学研究の同人グループのことだ。昭和九年一月に結成し、ちょうどその九年後解散を決定するまでに機関紙『中国文学月報』（途中、第六十号から『中国文学』に改題）を九二号まで発刊し、内容の濃い例会や懇話会を持っていたのみならず、戦争期を含む十数年の中で、実際に数多くの中国文学者たちとの交流も深めてきた。

「中文研」が歩んできた十数年間は、国内軍国主義が暴走し、満州事変につづいて対中侵略、そして国内では「言論統制」「思想の転向」といって、治安維持法が人間の精神活動にまで適用されてしまう日本近代史上もっとも暗黒の時代だった。同人たちは、常に戦争という得体の知れぬ獐猛なモノに直面しなければならない中で、「官僚化した漢学と支那学を否定することによって内から学問の独立を勝ち得ようとし」、「現代文化一般の批判者たらん」意気込みで中国文学、とりわけ中国現代文学の紹介と研究を盛んに展開させてきた。

そうした「脱アカデミック」的な性格をみずから特色とした「中文研」は、戦時中、大東亜文学者大会のみならず、日本文学報国会にも深く関わった。しかし、「大東亜戦争」が白熱し、国家思想の暗雲がすべて蔽い尽くした昭和十八年の一月に、この一群の外国文学の研究者は、それまで棚上げにしてきた彼ら自身のイデオロギー問題を解決しようとしたとき、戦時中における自分自身の言動にけじめをつける形で機関誌『中国文学月報』を廃刊し、同人グループを解散した。

戦後、「中文研」は『中国文学』第九三号を「復刊号」（昭和二一年三月）として発刊し、文芸復興風潮の中で再出発を果たしたものの、廃刊の原因となった問題を未解決のまま抱え込みつつ、昭和二三年五月に百五号の発行をもって再び研究会の活動に終止符を打った。

小稿は戦前の「中文研」と郭沫若およびその他の中国人文学者との関わりについて触れたい。

そもそも「中文研」の名前が正式に使われたのは、昭和九年八月四日に日比谷の中華料理屋「山水楼」で開かれた「中文研」主催の「周作人・徐祖正歓迎会」の時だった。お客さんが五四以後の新文学の重鎮だし、しかも日本文学の造詣も深いということで、歓迎会の発起人を佐藤春夫、竹田復、有島生馬、与謝野寛、新居格の五人に依頼し、さらにゲストとして島崎藤村、戸川秋骨、堀口大学三氏と漢学者塩谷温博士を招いた（名無しの権兵衛たちの研究会の発足にこれだけたくさんの大物の声援が得られるなんて、彼らも良き時代に恵まれたものだ）。司会是新居格に、そして代表挨拶は島崎藤村に要請した。主催者とはいえ、脚光を浴びるのは結局お偉いさんたちで、「中文研」はほとんど出る幕がなかった。それでも、かくして「中文研」は研究活動の第一歩を確実に踏み出したのである。

お客さんの二人はともに北京大学日本語学科の教授だった。公式訪問ではなかったし、得意の日本語をしゃべって宴会の空気に融けこんでもよかたのだが、なぜか周作人は終始中国語しか喋らず、挨拶はもとより、酒を飲みながらの懇談も徐の通訳を通していった。いくら「親日派」の有名人とはいえ、

はじめて彼にあった「中文研」の人々は違和感を覚えずにはいられなかったろう。

一方、徐祖正は創造社結成時のメンバーで郭沫若と仲がよかった。彼は来日したことを市川にいる郭に伝えた。郭沫若は連絡を受けた後徐の宿泊所を訪ねた。その後徐は周作人を須和田にある郭宅に連れて行き、「二堂（周は「知堂」、郭は「鼎堂」）の会見」を成就させた。後日郭は二人を連れて文求堂、そして千駄木にある森鷗外の住居跡「観潮楼」を案内した。当時のことは周作人日記と文求堂店主田中慶太郎に宛てた郭沫若の私信とで容易に確認できるが、郭は回想記「浪花の十日」に「豈明（周作人）先生の生活はまことに羨ましいかぎりだ。豈明先生は黄帝の子孫である。われもまた黄帝の子孫である。豈明夫人は天孫人種である。わが夫人も天孫人種である。しかるに豈明先生の交遊する相手は風雅なる墨客だが、わが友は、刑事、憲兵である。近頃豈明氏は江戸に暫く滞在し、江戸の文士の礼遇を受けている。時々招宴の記事が新聞紙に載る」と書き記し、穏やかでない胸のうちを来日中歓待される周作人に当り散らしていた。

その年の暮れ、「中文研」は第一回懇話会を開き、日本文学を勉強するために来日している二十八才の中国人女流作家謝冰瑩を講師に迎え、「吾が文学経歴」を題に卓話をしてもらった。

時の経つのが早いもので、「中文研」は結成一年の節目に亡命中の郭沫若に講演を頼んだ。昭和十年の郭沫若は、当時『中国古代社会研究』『甲骨文字研究』『两周金文辞大系』をはじめ、『殷周青銅器銘文研究』『金文叢考』『金文余積之余』『卜辞通纂』『古代銘刻匯考四種』など著書を次々と出版し、高い名声を得ていた。二年前の昭和八年一月六日『朝日新聞』は、「愛妻の国に晴耕雨読 著書を通じて園公の知遇——革命闘士の夢を見棄てて亡命の支那詩人」という表題記事で、「難獲良書御恩典被下朝来より夕刻までに三分の一を読破、啓蒙多感謝の至りに候」という『金文叢考』などを愛読した西園寺公望の賛辞を世間に披露し、そして同氏が敬意を表するために自ら須和田の郭沫若の家を訪れたことも伝えた。

「中文研」が懇話会の形ではなく、結成後初めての学術講演会を設けて郭沫若を迎えたのはおそらく彼の知名度に気を遣ったためだろう。

「中文研」の中心人物である竹内好、武田泰淳、岡崎俊夫の三氏は研究会を立ち上げる前から郭沫若と知り合っていた。東大哲学科出身の岡崎がプロレタリア文学者の藤枝丈夫の紹介で郭を知り、同学部支那文学科出身の竹内は郁達夫に関する卒論を書くために創造社のことを聞きに足繁く須和田に通っていた。その後武田泰淳も竹内の紹介を通して須和田で郭と知り合った。

「中文研」第三回例会は郭沫若の講演会だった。テーマは「易について」だった。この回に限って『朝日新聞』の「学芸」欄に広告が出たので、開催場所のイツ橋学士会館には百四名の出席者が駆けつけた。留学生が多かったが、人数が予想を遥かに上回ったので、急遽会場を変更せざるをえないという予期せぬことがあった。

「中文研」のもう一人の中堅メンバーである松枝茂夫は後年そのことを回想記に綴っている。簡単に紹介したい。

松枝は「中文研」結成時以前から時々文求堂で郭と会って短い会話を交わしていた。ある日、文求堂書店で郭に会ったとき「ぼくも君と同じように田中さんから金を貰って生活している労働者だよ」

と言われた。これは郭沫若の言葉にしては大変興味深い。なぜなら、その言葉が「俺たちは文求堂店主に搾取されているのだ」に聞こえるからだ。松枝は郭沫若と知り合った前後、奥平定世と共編で『現代实用支那講座』（第九卷「小説散文篇」）を文求堂から出版して印税を貰っていた。なぜか分からぬが、この話は『郭沫若帰国秘記』（殷塵著、言行出版社民国三十九年。ぼくはこの版本の複写本をもっている）に書かれたことを思い出させてくれる。著者は郭の日本脱出に同行した金祖同のことで、彼も実は文求堂田中慶太郎店主とのつき合いがあった。彼によれば、田中は郭の一連の著書を出版するにあたって支払った印税分以上に刷ってこっそり売っていた。郭沫若はそれに気付きソウトウ憤慨していたということだった。郭の自伝「我是中国人！」の中で両者の関係はかなり詳しく描出されているが、このような暗い側面がまったく読み取れないので却って真実味が欠けているように今は感じる。

知らぬ間に話がずれてしまった。では、本題に戻る。松枝によると、「中文研」の要請で郭沫若は易について講演を行なった。みんなは、彼が原稿なしに「左伝」や「礼記」などからの引用文を黒板にさらさらと書いているのを見て、すごいなあ、十三経など全部暗記できるのか、と目を疑わずにいられなかった、ということだった。実際、講演の際郭は事前に準備した資料を持っていた。古典の引用文は事前に目を通していたし、一部はもともと暗記できる。後日彼はその原稿を基に「〈易〉の構成時代」という論文に書き上げ、その年四月号の『思想』に掲載させた。

三回目の「中文研」例会には郭沫若にまつわる挿話がもう一つあった。会員小野忍はその頃富山房百科大辞典編纂に携わっていた。彼は例会のとき郭沫若に会い、編纂中の『国民百科大辞典』にある「周易」の項の執筆を頼んだ。念のために調べてみたが、確かに一九三五年富山房から出た『国民百科大辞典』第九二一八頁から九二二一頁まで間に「周易」という項があった。末尾の執筆者名は「郭沫若」となっている。これからの研究の好材料になると思うが、日本の百科辞典に政治亡命中の「支那人思想犯」である郭沫若による固有名詞の権威的な解釈があること自体は珍しい。

周知のとおり、「中文研」の機関紙は『中国文学月報』である。昭和十年三月五日に発行された第一号を見れば分かるのだが、十二ページのノンプルで、九ポ十四字二四行四段縦組の菊判だった。しかも表紙はない。第一ページの右上に筆で書かれた古風な隷書体の題字「中国文学」の四文字があり、そのすぐ下にある「月報第～号」は明朝体の活字が使われた。この題字は亡命中の郭沫若に頼んでわざわざ書いてもらったものだった。

竹内好の第一号発刊当時の回想（『未来』第二九号）によれば、『中国文学月報』が当時の日本では馴染まない雑誌名だった。当時中国関係の刊行物の名前は「中国～」ではなく、「支那～」とか「満蒙～」であった。「中文研」の人たちは中国人が「支那」という言葉を非常に嫌っていることを知っているのだから、わざとそれを避けて「中国」という名をつけたそうだ。市川亡命中の郭沫若の字がうまいと聞きつけ、武田泰淳はわざわざ須和田の郭宅まで足を運び、自分たちが小さな雑誌を刊行したい経緯を話し、題字の「中国文学」の四文字をご揮毫願いと頼んだ。郭沫若は快諾し、二枚書いて武田泰淳に持って帰らせた。検討のうえ、その中の一枚を使うこととなった。

『中国文学月報』第一号によると、編集者、発行人および印刷人はいずれも竹内好となっている。一人三役というわけだ。発行所は東京市芝区白金今里町八九中国文学研究会となっているが、印刷所は東京市神田区神保町一の三四にある株式会社開明堂となっている。開明堂といえば、亡命中の郭沫若の甲骨文字研究と青銅器銘文研究の著書の印刷を請負った印刷所だった。事務所は東京にあるが、工場は浜松にある。持っている漢字の量が多いということで、郭沫若の著書の印刷を文求堂から頼み込まれたらしい。『中国文学月報』もそうだった。文求堂店主は「中文研」の相談に乗り、開明堂を紹介した。



長い文になりましたが、最後に『中国文学月報』の内容について触れてみたい。『中国文学月報』に発表された中国文学者の作品は二種類ある。杜宣の「対研究中国文学者の一点貢献」（一号）、周作人の「与謝野先生紀念」（二号）のような中国語の原作、または錢稻孫の「北平に於ける日本文化研究の現状」（八号）のような日本語の原稿の掲載もあれば、「中文研」会員による翻訳作品もある。どちらかといえば後者の方が多い。現代文学のほうは文学研究会系統の作家論、作品論または作品の和訳が圧倒的に多い。創造社作家に関しては、郁達夫には特に関心があったと見受けられる。岡崎俊夫「楽焼の郁達夫」（四号）、同氏訳「我が夢、我が青春（郁達夫）」（四九号）、「煙影」（九六号）；竹内好「郁達夫覚書」（二二号）、同氏訳「所謂自伝なる者（郁達夫）」（七号）；大高巖訳「懷郷病者（郁

達夫)」(三二号)；近藤春雄「郁達夫と徒然草」(三六号)；猪俣庄八訳「五四文学運動の歴史的意義(郁達夫)」(五四号)があり、作家論計三編、作品翻訳五編もある。郁に対して郭沫若に示す関心は薄い。昭和十二年七月郭が秘密裏に脱出するまでにはわずか土屋治訳の「達夫の来訪」(二七号)一編のみで、脱出一年後には郭と郁への思い出の形で古谷綱武の「郭沫若と郁達夫の印象」(四四号)が出ている。戦時中は吉村永吉の解説付き翻訳「鶏」(五九号)があり、戦後には実藤恵秀訳「マルクス、孔子に会ふ(郭沫若)」(九五号)があっただけである。

(九月二十五日)

---

## 郭沫若の詩作とその背景

### 日本における四つの詩碑を通して

宮下正興

郭沫若はかつて二度にわたり合計約二十年間余りを日本で過ごしたことがある。帰国して十八年後の一九五五年十二月、日本学術会議の招請に応じて郭沫若は中国学術文化視察団団長として再び日本の地を踏んだ。訪日を果たした郭沫若は旧友や知人などに歓くに迎えられ、この時の心情を詩歌に多編詠っている。

郭沫若は留学時代の岡山と福岡を訪れた際に「重訪岡山」「遊岡山後樂園」「吊千代松原」「帰途在東海道中」などの詩を詠んでいる。また彼が十年(1928-1937)もの長きにわたる亡命生活を送った市川市須和田の旧居を訪れた際、その南向きの日本式木造の家、庭園の草木などを懐古し、「訪須和田故居」「別須和田」を詠

んだ。そして日本有名観光地を訪れた際に「宮島即景」「游別府」「箱根即景」などを詠んでいる。（これらの詩は大部分を『訪日雑詠』に収められている。）日本の友好人士らは岡山、市川市須和田、福岡と別府に関する詩編を詩碑に刻み、郭沫若文豪への崇愛と懐古の念を表し、日中友好の象徴とした。

郭沫若は一九一五年秋から三年間岡山第六高等学校（以下、六高）に学んだ。当校は操山と旭川を臨む山水美しい風景の地であった。彼は二四年、当時を思い浮かべ「あそこは私が常に登る操山があり、常に船に乗った旭川があり、毎朝晩必ず通った綺麗な後樂園があった。」注1）と振返っている。四十年ぶりに再び岡山を訪れた時には六高はすでに岡山大学に改名されていた。彼はこの時の思いを「重訪岡山」の詩に詠んでいる。

久別重游似故郷、操山雲樹郁蒼蒼、  
40年往事渾如昨、得見火中出鳳凰。

岡山はかつて鳥城と呼ばれた。後樂園は日本三大名園の一つで、名士池田光政の長男綱政により十四年余りの時間を費やし、一七〇〇年に完成したものである。この名園は鳥城を背景にし、操山の遠景を介して唯心山と沢の池を中心にしたものである。かつて園内には丹頂鶴が交歓飛び舞う姿もあったが、四十年後に訪れた岡山城は戦火に遭ったため既にその姿を留めていなかった。もちろん丹頂鶴の姿などはない。しかし岡山県知事三本行治（郭沫若六高時代の同級生）の招請を受けた郭沫若は、丹頂鶴への思いをこの詩に託し、三本に送ったのである。また

同時に「遊岡山後樂園」の詩を詠んでいる。

後樂園仍在、鳥城不可尋。

愿将丹頂鶴、作对立梅林。

郭沫若は五六年七月岡山県に對の丹頂鶴を寄贈した。丹頂鶴は繁殖し群れにまでなったという。岡山県は感謝の意を込めてこの詩を週刊「岡山大衆新聞」（1960年4月24日）の第一面掲載した。また六一年に後樂園の敷地内に「遊岡山後樂園」の詩碑を建立した。郭沫若の筆跡が黒御影石の中央に嵌め込まれてあり、下側に三本行治の筆なる記事がある。

一九五五年十二月十四日、郭沫若先生は六高卒業後四十年、懐かしき岡山を訪れた。先生は六高時代の当時のこの公園にて丹頂鶴の交歓飛び舞う姿を浮かべて深く感嘆し、この詩を書いた。翌年七月、先生はまた丹頂鶴對のものを寄贈された。有志者はこの詩碑を建立して記念とす。 一九六一年三月 詩碑建築委員会

郭沫若は岡山に深い感慨を持ち、七五年夏に六高建校七五周年に、第十六期卒業生としてわざわざ「七言絶句」一首を作り当校に寄贈している。この詩の筆跡書は「六稜回想」注2）（六高出版）記念集の巻首に掲載されている。

陟彼操山松径斜、思郷曾自望天涯。

如今四海為家日、轉憶操山勝似家。

郭沫若は六高卒業後に九州福岡に移り、一九一八年から二三年まで九州帝国大学医学部に学ぶ。五五年再び福岡を訪れて「帰途在東海道中」注3)を詠んだ。

戦後頻伝友好歌、北京声浪倒銀河。

海山雲霧崇朝集，市井霓虹入夜多。

懷旧幸堅交似石、逢人但見笑生窓、

此來收獲將何有？永不愿操同室戈。

郭沫若は「一九五五年冬、訪日の帰途に際し、岡山にて作った詩。十八年もの歳月を経た今日。一九七四年冬」としたため、この自筆の詩を福岡市に寄贈した。

注4)

遙かなる昔、福岡と中国大陸との交流が盛んであった紀元前五七年、後漢の光武帝は「漢倭奴王国」の金印を倭王に寄贈した。この金印は、一七八四年甚兵衛という名の農民により博多湾志賀島で発見された。その後この地に金印公園を設立し、観光と憩いの地として提供した。福岡市はこの歴史的意義の深いこの地に郭沫若の詩碑を建てたのである。この詩は山青水秀の海岸線に臨んでいる。詩碑の右側には原文、左側には日本語訳が刻まれている。

九州帝国大学卒業後、中国へ帰国した郭沫若であったが、二八年亡命の身となり、千葉県市川市須和田に十年余り身を隠すことになる。

五五年十二月五日、再びこの地を訪れた郭沫若は「訪日之行」に以下のように記している。「我々は忘れません。市川に自らの旧居を訪れた時、近隣の老若男女を問わず皆我々を熱烈歓迎し、感涙していたことを。」そして「訪須和田故居」を詠んだ。

山朴余手栽、居然成巨材。

枝条被剪伐、茎幹尚崔巍。

吊影懷銀杏、為薪惜古梅。

漫雲花信遠、已見水仙開。

須和田は江戸川の東側にあり、東京都とただ一つ川を隔てている。かつて庭園に植えた山朴と銀杏。十八年の歳月を経て山朴は大樹と成長し、銀杏は伐採されていた。

郭沫若は須和田の地でもう一首「別須和田」を詠んでいる。

草木有今昔，人情無變遷。

我來游故宅，鄰舍盡騰歡。

一叟攜硯至，道余舊日鐫。

銘有奇文字，久思始恍然：

「此後一百年，四倍秦漢磚」。

叟言「家之寶，子孫將永傳」。

主人享我茶，默默意未宣。  
相對察眉宇，舊余在我前。  
憶昔居此時，時登屋後山。  
長松蔭古墓，孤影為流連。  
故國正茶炭，生民如倒懸。  
自疑歸不得，或將葬此間。  
一終天地改，我如新少年。  
寄語賢主人，奮起莫俄延。  
中華有先例，反帝意持堅。  
苟能團結固，驅除並不難。  
再來慶解放，別矣須和田。

市川市日中友好協会の市川正、米沢秀夫らは郭沫若の訪問を記念し、日中友好の象徴として、この詩碑の建立計画を立案した。募金者三百余人、六六年須和田公園の一角に完成した。詩碑は正面に「別須和田」の自筆なる詩が刻まれ、右側面には郭沫若が中山服を身に付け、眼鏡を携えた半身像のレリーフが嵌め込まれてある。詩碑は黒の御影石で作られ、太陽光を受け閃光反射していた。

郭沫若のもう一つの詩碑は北九州東部の別府にある。別府は瀬戸内海を臨み、周知の通り温泉地である。泉源は十ヶ所余あり、海の地獄、血池の地獄、竜巻の地獄、十萬地獄などの奇名を称している。血池の地獄の水温は八十度以上に達し、

水は赤色である。

郭沫若は十二月二十四日に下関より旧ソ連船で帰国予定だったが、船が予定より一日遅れたため、友人の内山完造らと共にこの温泉地を遊覧したのである。そして観海寺の白雲山荘に宿泊した。地獄温泉を楽しんだ郭沫若はイタリア文芸復興時代の『神曲』「地獄編」を連想し、「游別府」を詠んだ。

彷彿但丁来、血池水在開。

奇名驚地獄、勝境擅蓬萊。

一浴宵増暖、三巡春満懐。

白雲千載意、黄鶴為低徊。

内山完造の別府遊覧追憶記『花甲録』の一説に以下のような記述がある。「彼らは各処の温泉を遊覧した際に、郭沫若は土産のハンカチと青鬼・赤鬼の面を買った。その晩、河豚を食した。」

郭沫若は五六年一月八日に別府大学生物学助教授であった二宮淳一郎にこのような手紙を送っている。

二宮淳一郎先生

お手紙を拝見いたしました。

別府にて、ご招待を賜り、深く感謝申し上げます。別府への旅、私にとって忘れられない一泊である。私是一首の五言律詩を作り、別紙に書きましたので同封差

し上げ、記念とします。

今後機会がございましたら是非一度四川の地に足を運んで下さいまよう、また水杉を欣賞して下さい。

郭沫若 一月八日

七九年、日本友好人士らは別府市鶴山麓の十萬地獄公園内に「遊別府」の詩碑を建立した。二本の青灰色花崗岩柱の間の黒大理石にこの詩が嵌め込まれている。当詩碑の除幕式は同年の三月三十日に、中国対外友好協会副会長の林林と郭沫若生前の秘書だった王廷芳を招いて行われた。

以上、日本友好人士らは郭沫若の詩碑を日本の四ヶ所に建立し、郭文豪の訪日を記念し、日中友好の架け橋に貢献した証と敬意を表したのである。

注1)『郭沫若研究』天津人民出版社 1981 p. 68

2)「六稜」は岡山六高の校章ある。

3) 東京から下関に至る東海道新幹線の車中で詠んだもの。

4)『郭沫若全集』文学編第五卷、北京人民文学出版社 1982 p. 118

---

## 【編集後記】

今号の原稿募集は八月三十一日に締切った。その日までに事務局に届いた投稿は、山東大学文学院中国現代文学博士課程在学中の会員宮下正興さんの一本のみ。

夏休みは一ヵ月以上あるので、会報の執筆くらいは絶対大丈夫だと思っていたが、誤算だった。これから募集期間を長めに設定しよう。

今回お届けする随筆「作品の力と寿命のこと」と「青島郭沫若学会参加記」はその後ぼくが強引に頼んだものだ。杉本・岩佐両氏が書いてくださったおかげで今号の発行が出来た。ほんとうに心強く思い、この場を借りて厚く御礼を申し上げたい。

もともとは郭沫若の古代文字研究に関する成家徹郎氏の文章を掲載する予定だった。氏は十月十八日～二十日の間成都で開催される「巴蜀文化研究新趨勢国際討論会」に参加するために発表論文「甲骨文中的巴與蜀」の準備に追われ、わたくしも古代文字に疎いので、結局会報における古代文字の表示問題は解決に至らなかった。余裕をもちたいので、次号で掲載することにした。最初から積極的に氏の解決案を聞いておけば今号はもっと充実になっていたかもしれない。重ねてお詫び申し上げます。 (武)